

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成23年 6月10日現在

機関番号：84604

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20760438

研究課題名（和文）南都諸大寺の中世寺院への転成過程に関する建築史学的研究

研究課題名（英文）Architecture historical research on transformation process to buddhist temples in the Middle Ages of the Nanto(Nara) large temples

研究代表者

大林 潤 (OBAYASHI JUN)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員

研究者番号：40372180

研究成果の概要（和文）：古代南都寺院が中世寺院へと変化する前段階の伽藍配置や建物の機能などを解明することを目的に、現存遺構や文書類とあわせて、発掘調査によって確認された遺構の情報を収集し、1180件の情報をまとめたデータベースを作成した。同時に、遺構平面図のデジタル化も行っている。この作業において収集した資料と、古代の各寺院に関する文献資料とを比較し、西大寺について古代の伽藍配置と建物の機能について検討をおこなった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the function and site planning of ancient Nanto(Nara) large temples. As the first stage, I collected information on the excavation investigation about Nanto temples, and constructed the data base with 1180 information. The digitalization of the site plan also did. By using this data base, site plan and the document materials concerning ancient temples, I examined the function of an ancient temple building of Saidaiji temple in Nara.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築史・意匠

キーワード：南都寺院、伽藍配置、西大寺、発掘遺構

1. 研究開始当初の背景

現存する南都の古代寺院の多くは、平安宮への都の移転や、中世の平重衡による焼討などの影響により、創建当初の伽藍配置を必ずしも優良に残しているわけではない。古代の伽藍配置については、これまでも多くの研究者が、現存遺構・依存地割・文献資料・発掘調査成果などをもとに復元を試みている。大岡実や太田博太郎などがおこなったこれらの研究成果は、今日の南都寺院研究の基礎となっている。

しかし建築史学者によるこれらの研究は、まだデジタル技術が確立される前に行われたものであり、伽藍の基本的な配置計画に関しては有効であるが、地図上に実測図を手作業で張り込んで検討するという方法で行われており、細かい寸法や角度などまでは研究対象とはされていなかった。

一方で、考古学の側からは、遺構の平面的な傾きや寸法などを検討するという手法が徐々に構築されていた。具体的には、いくつかの遺構の座標値を読み取って計算により

数値を導き出し検証するといった方法がとられていた。

このような研究手法は今日も行われているが、高性能コンピュータが汎用化した現在、この作業はより簡便で正確で、なおかつ広範囲を対象とすることが可能となった。

このような状況で、過去の研究をふまえた上で、新しい成果を加えたより高精度の検証が技術的に可能となったことが、本研究の着想に至った経緯である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、南都の諸大寺の伽藍配置を、発掘調査と現存遺構を高性能コンピュータによるデジタル技術を用いて再整理し、その造営計画を明らかにし、主に伽藍配置や建築の性格を対象に、建築史学的方法と、発掘調査による知見、文献史料の検討をおこなうことを目的とする。

3. 研究の方法

- (1) 平城宮跡および南都諸大寺（東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、薬師寺、西大寺、西隆寺、法隆寺、唐招提寺など）の過去の発掘調査成果の収集、デジタル化とデータベースの構築。
- (2) (1) で収集した資料を用いて、南都古代寺院の伽藍配置の再検討。
- (3) 上記寺院の伽藍配置に関する文献資料の収集とその検証。

(1) は、奈良文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会の各調査機関の発掘調査報告書を寺院ごとに収集し、調査内容（調査面積、調査年度、調査期間、調査担当者等）と、遺構平面図の画像データを収集し、データベースソフト（ファイルメーカー）を用いて、データベースを作成した。対象とする遺跡は、今後の研究対象の拡張を考慮し、南都の諸大寺以外にも、寺院、神社などの宗教施設にかかわるものを含めた。

(2) (1) で収集した発掘調査遺構図は、CADソフト（ベクターワークス）を用いて正確に張り合わせ検証作業の基本資料とした。

(3) は、「資材帳」と呼ばれる、奈良時代の各寺院の財産目録である文献史料を収集し、特に建築にかかわる部分について資料を検証した。

4. 研究成果

- (1) 南都寺院発掘調査データベースの作成
本研究では、南都の寺院神社遺跡に関する発掘調査資料を収集することが最初の目的であり、その後の研究を進めるための基本となる作業であった。収集の対象を平城京内の寺院とするために奈良市教育委員会、奈良県教育委員会（奈良県立橿原考古学研究所）、

奈良文化財研究所で刊行している報告書とした。同時に、本研究以後、その対象を飛鳥時代や奈良時代以後の寺院にも拡大していく予定であったため、平城京以外の寺院神社遺跡に関しても収集することとした。そのため、結果的に本研究における作業の大半を占めてしまったが、最終的に収集した資料は、合計 1180 件となった。ただし、このデータベースは、調査概報として各機関が報告したもののみを収集したものであり、その後、正報告書が刊行されたものや、防災工事や解体修理工事にともない行われた発掘調査のうち、調査報告がそれらの工事報告書にのみ記されているものに関しては含まれていない。そのため、各遺跡の概要報告書を参照する際のツールとして、また収集した図版を整理するためには大変有効なものとなった。

データベースの項目は、以下のとおりである。

- ・寺院名…東大寺、興福寺、法華寺など
- ・調査機関
- ・次数…調査機関ごとに異なる調査次数がつけられている。
- ・調査年度（年号および西暦）
- ・調査地…住所等
- ・事業名…調査原因など
- ・調査開始日、終了日
- ・調査面積（㎡）
- ・調査担当者
- ・掲載報告書名、発行機関、発行年月日、掲載開始ページ
- ・図版…400dpi、tiff 形式で保存。

図1 南都寺院発掘調査データベース画面

表1 南都寺院発掘調査データベース件数一覧

寺院名	件数	寺院名	件数
阿弥陀谷廃寺	1	斉音寺	1
雨師観音堂	1	石光寺	5
円証寺	1	惣豪寺	1
横井廃寺	3	増福寺	1
横田堂	2	大安寺	142

岡寺	2	大乘院	18
加守寺	3	大神神社	2
海竜王寺	10	大峰山寺	3
額安寺	4	達磨寺	17
櫻原廃寺	1	竹林寺	2
歓喜寺	1	中宮寺	7
観音寺	3	朝妻廃寺	1
観覚寺	1	長寺	1
願興寺	1	長林寺	5
喜光寺	4	唐招提寺	23
紀寺	13	塔の宮廃寺	1
吉野山金峯山寺	2	東紀寺	6
橘寺	3	東寺田	3
久安寺	1	東大寺	136
久米寺	1	東福寺	1
興福寺	91	内山永久寺	3
金峯神社	1	二光寺廃寺	1
元興寺	66	尼寺廃寺	1
古市廃寺	1	念仏堂	1
呉原寺	1	白毫寺	3
廣大寺池	1	不退寺	2
讃岐神社古墳	2	平等寺	2
寺戸廃寺	1	平隆寺	4
慈明寺	2	片岡王寺	9
秋篠寺	3	法華寺	172
春日大社	12	法樂寺	1
小泉堂	1	法貴寺	3
新薬師寺	13	法起寺	14
菅原寺	4	法隆寺	45
成願寺	3	法輪寺	2
正暦寺	2	豊浦寺	6
西安寺	1	満願寺	3
西大寺	76	毛原廃寺	6
西隆寺	29	薬師寺	86
誓多林廃寺	2	當麻寺	2
		その他	68
計			1180

・西大寺旧境内の再検討

西大寺旧境内については、上記データベースによると、これまで 76 件の発掘調査が報告されている。このほか、『西大寺防災工事報告書』（1990 年、奈良文化財研究所）、『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』（2007 年、奈良文化財研究所）などにも報告されている。

西大寺の発掘調査は、早くは浅野清らによる東塔・西塔の調査があり、現在の本堂の前に残る東塔の下に、『日本霊異記』に記された八角塔の基壇が前身として築かれていたことが明らかになっている。

西大寺の伽藍に関する研究は、これらの部分的な発掘調査に加え、奈良時代の西大寺の伽藍について記した「西大寺資財流記帳」の記載事項、また、江戸時代に記された「西大寺伽藍絵図」、さらには遺跡周辺の依存地割によって復元が試みられてきた。代表的な伽藍復元図には、宮本長二郎案、奈良市案の 2 案がある。これらの 2 案に共通する事項としては、中央に金堂院があり、その前面に東塔、西塔の二つの塔が建つこと。南東隅の「東南角院」から反時計回りに、「四王院」「小塔院」「食堂院」「政所院」「正倉院」「十一面堂院」「西南角院」が、それぞれ塀で区画されており、それらが 1 町分とみられるほぼ正方形の敷地を構えていること、などがあげられる。

その後、西大寺の創建において重要な施設である四王院に関して調査が行われた。2002 年に奈良文化財研究所がおこなった防災施設にともなう発掘調査では、創建当初の四王院の規模が明らかになり、四王堂が想定されていた三坊六坪の中心よりも東寄りに建てられていたことが明らかになった。

その後、奈良市教育委員会や奈良文化財研究所がおこなった食堂院推定地の発掘調査では、食堂・盛殿・大炊殿とみられる建物が中軸を揃えて南北に建っていたことが明らかになった。この発見は、伽藍復元案の院地区の位置が、復元案通りである可能性を強くする一方、食堂院の中軸が想定される坪心よりも東によっていたことを示し、これらの復元案の細部に関しては、さらなる検討が必要であることを示した。

そこで、上記で収集したデータベースと、その他の刊行物より発掘調査の遺構平面図を CAD ソフトへ取り込み、実際にどの程度東へずれているのかを検討した。

その結果、食堂院の中心堂宇の中軸線は、想定坪心よりも 17.1m 東に位置しており、中軸線から東の坪境までの距離を西に折り返した距離（食堂院想定東西幅）は 97.5m となり、想定東西幅（131.7m）の約 4 分の 3 の幅であることが判明した。すなわち、食堂院の区画は右京一条三坊八坪の東側 4 分の 3 坪を占めていたと考えられるのである。

(2) 古代寺院伽藍の再検討

四王院に関しては、以前より一坪に満たない区画であったと考えられていたが、北端の食堂院も同様に東西に狭い敷地を構えていたとすると、東西対象を基本とする古代寺院の伽藍配置を考えるにあたって、西側の院区画（政所院、正倉院）についても、東西方向に狭い敷地を構えていた可能性が高いといえよう。

このように、金堂、塔を囲む周囲の8つの院区画がすべて一坪に満たない敷地を構えていたとすると、それ以外の部分、すなわち金堂院と東西塔があったとされる伽藍中央部の配置が問題となってくる。また、正倉院や政所院は「西大寺資財流記帳」を見る限り、小規模ではあるが食堂院や四王院と比較しても数多くの建物が建てられており、果たしてこれらが東側の院区画と同様に、東西4分の3坪程度の敷地であったかは、十分な検討を必要とする。西大寺旧境内の西半についての発掘調査は、小規模調査ばかりであり、まとまった面積の調査が行われていない現在、発掘調査を元とした検討は難しく、今後は依存地割や地形、他の寺院における建物配置を元とした研究が必要となる。

なお、西大寺の伽藍配置に関しては、2012年刊行予定である『文化財論叢』（奈良文化財研究所）にて論考を発表する予定である。

- ・食堂院における各建物の機能について

西大寺食堂院に関しては、上述の2006年度の発掘調査により、食堂院の主要堂宇が中軸上に並ぶことが明らかになった。このことは同時に、「西大寺資財流記帳」の記述内容の信憑性を裏付けるものでもある。「西大寺資財流記帳」には、食堂院内の建物として、食堂・盛殿・大炊殿・厨・蔵などが挙げられている。このうち発掘調査では食堂・盛殿・大炊殿の遺構が確認され、厨があったと考えられる位置には、80基もの甕を並べた埋甕遺構が検出されている。一般に、「厨」は食事の調理をするところと理解されているが、西大寺の場合は、他に飯炊きをおこなったとみられる大炊殿があることから、「厨」には大炊殿とは異なる機能を有していたと推測さ



図2 西大寺食堂院埋甕遺構

れた。

そこで、他の南都寺院に関わる資料を検討すると、「東大寺要録」には仏聖僧供を調達する施設として、大炊殿、糞所、碓所、北酒所、油所と並び、北厨、南厨と2棟の厨が記されている。史料には、これらの建物の内部に備わる品も記されており、例えば大炊殿は飯用と粥用の二つの大釜があったことがわかる。これらは、大きく分けて「調理場」「食材の保管所」「調理・食事器の保管所」の3つとなり、厨は「在甕百四十二口」とあることから、食材の保管場所であったと考えられる。

西大寺食堂院へ立ち戻ると、大炊殿と厨はそれぞれ「調理場」と「食料保管所」と解釈することができる。遺構でも東厨推定地で埋甕遺構が確認されており、建物の痕跡は確認できなかったが、内部に埋甕を備えた厨であったと解釈することができる。

以上より、食堂院の建物配置と各建物の機能を整理する。まず、食堂は僧達が食事をとる場所であり、その背後にある盛殿、大炊殿は、配膳と調理の場となる。大炊殿の東西には、内部に甕を備えた厨が建つ。これは食品を保存・貯蔵していた建物である。甕の内部には、「東大寺要録」を参考とすると、油、酒などが考えられるが、発掘調査では周辺より多量の製塩土器が出土していることから、醬などの可能性も考えられる。この厨の北側には倉代が建つが、ここには食器や調理器具などが保管されていたとみられる。さらに校倉が大炊殿の北側に推定されるが、これには米などが保管されていたのであろう。

以上が本研究の主な成果である。本研究では、南都寺院の伽藍配置を再検討するための基礎的資料の収集を基本作業とした。研究当初の計画よりも収集作業に多くの時間が割かれてしまい、その後の検討作業が西大寺のみにとどまってしまった。しかし、本研究で収集した資料は、当研究所が継続的に行っている南都寺院の研究や発掘調査の際には有効利用することが期待され、今後はこのデータベースに新資料を追加することによって、研究の補助となることと確信している。

伽藍配置の研究に関しては、今後も西大寺以外にもフィールドを広げ、継続して検討を重ね、論考をまとめていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大林 潤 (OBAYASHI JUN)

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化

財研究所・都城発掘調査部・研究員
研究者番号：40372180

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者